

辺野古沖の制限区域への侵入を防ぐブイの向こう側には、ボーリングなどを行なう大型作業船と防衛省沖縄防衛局(ODB)の船。手前ではODBの旗を掲げた小型漁船も監視に就いている(編)



劣化する日本 民主主義への闘い

沖縄はどこよりも 基礎体力がある

文・写真=三上智恵 (編)は編集部撮影



みかみ・ちえ
ジャーナリスト、映画監督。毎日放送、琉球朝日放送を経てフリーに。ヘリパッド建設に反対する高江を舞台にした『標的の村』(2012年)は山形国際ドキュメンタリー映画祭日本映画監督協会賞・市民賞はじめ多数受賞。『戦場ぬしみ』(15年)では辺野古基地建設をめぐる人々を撮影。

「移設」ではなく「新基地建設」

私は沖縄で1995年から2014年までの19年間、ニュースキャスターを務めながら基地問題を取材し、ドキュメンタリーをつくらせてきた。基地関連のニュースは常に沖縄ではトップに位置づけられる。でも全国の視聴者の関心は低い。沖縄で報道を経験すれば誰でもそのギャップに悩むだろう。それでも国策である基地政策を変えるには国民の意識を変えねばならない。だから深夜早朝枠であっても、いつも全国ネットに乗せる機会をうかがってきた。

中央メディアはよく「普天間基地の移設問題」という言葉を使う。あたかも普天間基地の返還で負担を軽減する話のように響く。しかし、実態は軍港と滑走路と弾薬庫が連動するかつてない複合的な基地を、辺野古に新設する話に過ぎない。「基地の返還」を装った「新基地建設」、この巧妙な話のすり替えについて、地元メディアは調査報道を元に何度も

沖縄県の基地の現状

県人口は143万人。沖縄本島の約18%が米軍基地。沖縄全体の米軍施設面積は2万2619.4haで、在日米軍全体の74.4%にあたる。普天間飛行場の機能を果たす新しい施設を辺野古沖に建設する計画をめぐり、国と県による代執行訴訟が3月1日に結審した



(沖縄県知事公室「沖縄の米軍及び自衛隊基地 平成27年3月」などより作成)

疑問を呈して「代替施設」というまやかしの言葉を排除したが、全国メディアはそこに踏み込まなかった。

高江ヘリパッド建設の映画が大反響

沖縄県民をだましにだまして、あざむき続けた末に、2012年、ついにオスプレイが普天間基地に配備される日が迫った。私もオスプレイが飛び交う空の下で子育てをする県民の一人だ。こんな国策の暴力的な進め方を白日の下にさらして国民の審判を受けるべきだと思いを決し、ヘリパッドに囲まれてしまう高江という北部の集落を舞台にしたドキュメンタリーを、オスプレイ配備直前、全国にぶつけた。それが『標的の村』テレビ30分版だった。

高江の住民たちは07年から5年間も座り込んでヘリパッドの建設に抵抗してきた。その過程では、国が個人の住民を訴え、弾圧目的の裁判にかけていくという信じがたい出来事もあった。

また住民は「自分たちの住む山あいの村をまるごと訓練の標的にするつもりだ」と告発。かつて高江の隣につくられた「ベトナム村」では、村を襲うゲリラ訓練で住民がベトナム人の役をさせられたという苦い記憶があったのだ。

米軍にとって沖縄は、太平洋戦争で血を流して勝ち取った島だ。どんな訓練をしようと、協力を強要しようと当たり前だという占領意識を持っている。しかし一番の問題は、アメ

*1 2012年10月、最初のオスプレイ（新型輸送機）が普天間基地に配備され、13年9月に24機態勢が完了した。

*2 東村高江集落。オスプレイも配備予定の米軍ヘリパッド（着陸帯）6カ所が集落を囲む予定。07年に工事が開始され、うち2カ所が完成、15年1月に米軍に引き渡された。